

私の研究 昨日、今日、明日

湧 口 清 隆

1. はじめに

2025年は昭和100年、戦後80年と話題になったが、早いもので私も50年以上生きている。50歳の誕生日には「もう半世紀生きちゃった!」とシャンパンで祝ったが、健康寿命を考えれば、この先の後半生の生き方を真剣に悩まなければならない。大学教員という生き方の是非も含めて、大いに考えていく必要がある。改めて自分の研究を振り返るとき、いろいろな方々や動物との出会いが、人生を変えてきたなと思わざるを得ない。

2. 昨日

小さい時から鉄道が好きであったし、気象にも関心が強かった。鉄道といっても「乗り鉄」「撮り鉄」でもないし「模型屋」でもなかった。時刻表を読むのが好きで、小学校高学年の時に授業中に勢いで「ぼくの読み物時刻表」のような題で作文を書いたら、区の作文コンクールで入賞し嬉しかった。

そのような訳で中学に進学後は「スジ屋」が主流ではない鉄道研究会には入らず、気象部に入部して6年間観測を続けていた。台風が来ると、また、極値が出ると面白かったし、観測・観察していることが楽しかった。休日でも電車で1時間以上かけてよく観測していたと思う。中学時代に、授業中に『会社四季報』を机の下に隠して貪り読み、袖の下に短波ラジオを隠して相場を聞いていた友達に出会った。「そんなに面白いのか」と聞いたら「面白い」という。結局私も株式投資をすることになり、第3セクター鉄道ブームの中で富士重工業の株式を購入したらそこそこ儲かった。それが経済学、とくに交通経済学を志すきっかけとなった。

高校時代に今でいうところの「探求」にあたる授業でコンピューター航空に関する研究を行い、学内の研究賞を受賞したと、授業で履修していたフランス語において、たまたまあみだくじでフランスへ2か月余りの留学機会を得たことが、その後の人生を変えた。1か月間ホームステイして現地の高校に通い、1か月間はフランス国内を旅行した。カルチャー・ショックの連続だった。おかげで大学受験は散々だったが、それ以上の経験を獲得できた。

留学機会が豊富で交通経済学を学べるということで一橋大学に進学し、山内弘隆先生のゼミに所属した。一橋大学では、新小平駅陥没事故のおかげで、「経済学通論」を担当されていた石弘光先生と朝電車で一緒にさせていただくことができ、経済政策の重要性や面白さ、大学教員のあり方などの話を聞かせていただいた。体育の授業を担当していた早川武彦先生からは後年、ピエール・ブルデューの社会学を学ぶことになったし、社会地理学の竹内啓一先生のゼミにも出入りし、社会学、地理学を学び、巡礼について研究した。

3年夏から4年夏にかけてフランスHEC経営大学院に1年間交換留学し、最後の2か月半をフランス国鉄貨物局国際部イタリア課で車扱貨物運賃制度を提案するインターンシップを経験することができた。営業や収入分配などの原データに加え、為替問題をめぐるファックスを使った両国の担当者間の応酬などをもとに制度を考える必要があった。この経験は後年、わが国の電波利用料制度の改正（2005年）案のたたき台を作る際に大いに活きた。

大学院では山内先生の指導下で交通・公共システム論を学んだが、修士課程では同期の院生が多かったので分野調整が入り、鉄道ではなくテレビ放送について修士論文をまとめることになった。これが縁で慶應義塾大学の菅谷実先生の知己を得、大学院修了後、(財)国際通信経済研究所に勤務することができた。博士論文では、根本敏則先生、杉山武彦先生の指導も受けつつ、青森県津軽地方で住民たちがお金を出し合って路線バスを引いた弘南バス深谷線をテーマに、供給に不確実性がある財・サービスの存続に見出す利用価値を超えた価値である「オプション価値」がどの程度あるか、オプション価値の大きさと公共財の自発的供給への協力度の関係性を理論、実証双方のアプローチで分析した。特筆しなければならないのは、博士課程最後に山内先生のお手伝いとして国営公園の便益評価に携わることができたことである。

(財)国際通信経済研究所では、わが国の携帯電話が「3G」で輝いていた時代に海外の通信・放送企業や政策の動向調査を担当した。また、総務省からの受託で海外の電波利用制度の調査を担当した。海外でのヒアリングの中でPhillipa Marks氏に出

会えたことが、交通・情報通信・観光・エンタメにわたる学説史を調べるきっかけとなり、Martin Cave先生、Erik Bohlin先生、Gérald Pogorel先生と親しくなることにつながった。さらに、フランスの電波利用制度に大きな影響を与えていた映画政策についても知見を深めた。九州大学大学院比較社会文化研究院客員助教授として電波政策に関する授業を1年間担当できたことも、コミケを知り、「ギッフェン財」として自治体主導の百円バスを考えるきっかけとなった。研究所での一番の収穫はフランス語圏、英語圏の法律や官報の検索方法を覚えたことで、その後の政策研究に大いに役立った。

3. 今日、明日

2004年4月に相模女子大学に着任し、情報通信の枠にこだわらなくてよかったことは研究の幅を広げることになった。日本交通学会での研究発表において、当時管制官だった西澤宏員氏と知り合ったことは、今日に続く無線周波数、空域、道路という希少な公共資源の配分問題の研究に発展した。また、東京経済大学の青木亮先生と一緒にフランスのトラム（路面電車）を中心とする欧州の都市公共交通の研究も足掛け20年に及んでいる。さらに並行して菅谷先生のグループで映画政策を研究する中で、在日フランス大使館に出入りすることになり、その縁から青木先生とともにEmmanuel Dumas氏のわが国の私鉄ビジネス、とりわけエキナカに関する博士論文の指導・審査を担当することになった。これが2024年以降、文化庁「食文化ストーリー」創出・発信モデル事業の中で広島駅弁当株式会社、JR西日本とともに実施している駅弁の登録無形文化財化に向けた調査にも大きな影響を及ぼすことになった。駅弁や機内食の研究は、交通・電波政策の調査で国内外を飛び回るうちに写した写真を、派生需要としての交通や道中食を本源需要である社会・経済事象と結び付ければ良いというアイデアから生まれたものである。

今日の研究を語る上で絶対に抜きにできないことは、2011年夏にシンガポール動物園を訪ねた際にスコールに遭い40分ほど動けずにいたのがコツメカワウソの展示場であったことだ。カワウソを見ているうちにカワウソの魅力にとりつかれ、全国の動物園・水族館をめぐるうちに、よこはま動物園ズーラシアの村田浩一園長や帝京科学大学の佐渡友陽一先生、東京農業大学の安藤元一先生の知己を得た。これをきっかけに動物園学と一緒に勉強させていただくことになり、博士課程においてお手伝いした公園の便益評価の調査と結びつくことになった。

日本交通学会での同志社大学の安達晃史先生、流通経済大学的那須野育大先生との

出会いは観光列車の研究につながり、ローカル交通を残すという観点だけではなく、鉄道や沿線地域が生み出す外部便益をどのようにマネタイズして交通の維持のために有効活用できるのかという視点から分析を進めている。

最後に2008年の社会マネジメント学科、2026年の地域クリエーション学科の開設に携われたことは、単に自分の研究を研究で終わらせるのではなく、人材育成という形で社会還元できたのではないかと思う。相模女子大学で長らく地域連携事業に携わってきたが、食のロジスティクスの知識を現場で身につけることになった。その過程で鈴木政宏氏、土口直洋氏、菅野真一氏、星野誠氏らのお世話になった。また小田急グループとの連携事業や、連携教育推進課を通じたJR西日本の奥山喜文氏との出会いが、自らの研究を実践面を踏まえた研究へ昇華させることになったと感謝している。

4. おわりに

とりとめのない雑文になってしまったが、いろいろな方々や動物との出会いが人生を変えてきた。今後もどのような出会いがあるのか、それを自分の研究や社会貢献の中にどのように活かせるのか、楽しみにしている。